



# リスク情報と地域防災

Vol. **5**

特集：  
 柏崎市北条コミュニティの取り組み

## 目次

柏崎市北条コミュニティの取り組み－北条ネット、市民レポーター養成講座、地域間交流－ ..... ◆ 2

地域防災力を高める市民活動の実践－北条を知る、北条を伝える－ ..... ◆ 4

- ・ 第1回市民レポーター養成講座「伝えるってなんだ!？」 ..... ◆ 4
- ・ 第2回市民レポーター養成講座「市民の目からみた地域コミュニティの取材と編集」 ..... ◆ 5
- ・ 第1回地域間交流「つくば市民レポーター、つくば市北条地区商工会青年部との交流」 ..... ◆ 7
- ・ 第2回地域間交流「NPO 法人 藤沢災害救援ボランティアネットワークとの交流」 ..... ◆ 9

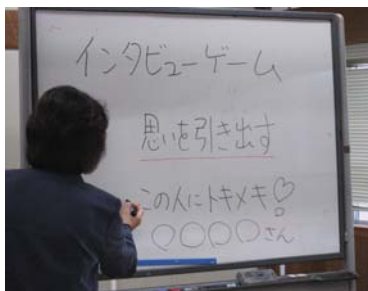
プロジェクト活動報告 ..... ◆ 12

Research Project on the Disaster Risk Information Platform **BOSAI-DRIP**

地域防災力を高めるためには、個人や地域コミュニティ、NPO、民間事業者、行政などをはじめとする多様な関係者が協働してリスクに備えるという「リスクガバナンス」の考え方が必要です。リスク研究グループは、災害リスクに関する知識（専門知、経験知、地域知）を統合し、高度なリスクガバナンスを実践するための情報技術や社会制度の研究と開発に取り組んでいます。

## 地域防災力を高める市民活動の実践－新潟県柏崎市北条（きたじょう）地区の取り組み－

中越地震（2004年）、中越沖地震（2007年）という2つの大きな震災を体験した柏崎市北条地区では、平常時からの地域内でのつながりが災害時に有効に働き、地域の防災力の向上につながると考え、さまざまな取り組みを行っています。進化を続ける北条コミュニティの「いま」をご紹介します。



市民の目線で北条の「いま」を伝える  
 －市民レポーター養成講座



平時・災害時において北条地区内外の  
 情報共有と情報発信を担う－北条ネット



高齢者の食生活を、地域住民が支える  
 －手作り総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖」



北条の魅力味わう－「暖暖」での会食



相互の取り組みを紹介したあと、  
 意見交換（地域間交流）

## 柏崎市北条コミュニティの取り組み

—北条ネット、市民レポーター養成講座、地域間交流—

### 北条コミュニティの取り組み

新潟県柏崎市では、旧自治省（現総務省）が推進したコミュニティ政策を契機にコミュニティセンターが建設され、現在 32 のコミュニティ組織が存在しており、この組織が地域住民主体による災害対応活動に重要な役割を果たしています。

そのコミュニティ組織の一つである北条コミュニティは柏崎市の東部に位置し、人口約 3400 人、面積は 44.78km<sup>2</sup> で JR の駅が 3 つもあるほどの広大な地域です。北条コミュニティでは、中越地震（2004 年 10 月 23 日）と中越沖地震（2007 年 7 月 16 日）という 2 つの大地震に見舞われましたが、その教訓を生かし、地道な取り組みを行ってきました。自主防災体制の整備はもちろんのこと、平常時からの地域内でのさまざまなつながりが災害時に有効に働くとの観点から、北条人材バンク（北条地区助け合いセンター）、災害時要援護者台帳の整備、手作り総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖（だんだん）」など多彩な取り組みを実践し、地域課題の解決を目指しています。詳細については、広報誌『リスク情報と地域防災』Vol.3「学校と地域が連携した防災訓練—新潟県柏崎市北条地区」をご参照ください。

本号では、地域の総合防災力のさらなる向上を目指し、北条コミュニティが現在取り組んでいるさまざまな事例を紹介します。

### 地域からの情報発信 —北条ネットの創設—

北条ネットは、北条コミュニティ（内部）における情報の共有と、北条コミュニティ外（外部）への情報発信、そして平常時、災害時の情報共有・情報発信、さらには、北条の文化資源、地域資源のアーカイブを作ることなどを目的にしています。専門的な知識がなくても操作できる仕組みを活用し、地域のコミュニケーションの向上に寄与することを目指しています。

本サイトは、独立行政法人防災科学技術研究所（NIED）が開発

した、地域社会を支える参加型の Web システム「e コミュニティ・プラットフォーム 2.0」\* を活用しており、防災や防犯にも役立つ機能も搭載しています。e コミは NIED の災害リスクガバナンス研究プロジェクトの実証実験の場でもあります。

2009 年 8 月 20 日に第 1 回の北条ネット講習会を開き、NIED からその機能と使い方について紹介しました。当日は 10 名ほどの参加があり、ワープロ感覚で自分やグループのブログが作れることを体感していただきました。今後も可能なかぎり講習会を開催し、北条の多くの方々に使っていただきたいと考えています。

### 市民レポーターとは

市民レポーターは、地域の身近な生活情報やイベント、市民活動などをレポートし、発信していく役割を担うものですが、災害時には災害レポーターとして活躍することが期待されています。

NIED では、平常時から地域について調べ、その結果を共有しておくことで、災害に備え、また実際に災害が起きた場合に適切な対応がとれることから、こうした市民レポーターの活動も地域防災力の向上につながると考えています。

茨城県つくば市は、2009 年 3 月から市民レポーター養成講座がスタートし、その活動が先行している地域です。市民レポーターは、普段はつくばの自然や環境、グルメ、子育てなどの情報を同じく e コミの機能を活用した「e コミュニティつくば」で発信していますが、同年 10 月 8 日の台風 18 号のときには、生活道路の冠水や不通などの情報がレポートされ、身近な場所の被害状況を把握するために有意義な活動であることが、地域住民に理解されています。

また、つくば市では、保育園における災害時の子どもの引き取りなどの対応について知りたいという市民レポーターの提案から、現在市民レポーターによる取材や調査が行われています。市の計画上の取り扱い、福祉避難所や学童保

育との関係、保育園周辺地域の大地震の際の被害想定など災害に関する情報が収集されています。

この取材の前提として、保育園周辺の地域状況を把握するために、地域で発生する災害の特徴を共有し、対策を検討しました。その際、e コミのマップ機能を使って出力した地図を用いて、保育所や公共施設、道路などの位置を確認し、また、昔の地図と現在の地図を比較するなど、各地点の特徴やエピソードなどを交えながら、把握していきます。この結果、1970 年代、この地域には田畑が広がり、たくさん水路があったことが分かり、場所によっては地盤強度に懸念があることも共有されました。



\*e コミュニティ・プラットフォーム 2.0  
地域社会を支える参加型のコミュニティ Web システム。ブログ、掲示板、マップ、カレンダー、RSS、SNS などさまざまな機能を搭載。オープンソフトウェアとして公開しており、無償で活用することができる。

<http://bosai-drip.jp/ecom-plat/>

### 北条における 市民レポーターの取り組み

北条ネット内にも、市民レポーターの記事を掲載するコーナーがあります。北条周辺の地域の身近な話題や役に立つ生活情報、市民やグループの活動などを市民の目線で取材し、パソコンやインターネット、携帯電話などを使用しながら、ブログなどを通じて情報発信していきます。

北条市民レポーターは、北条とその周辺地域に在住／在勤／通学している方々を対象としています。また、執筆された記事は北条ネットのみならず、広報誌『山なみ』にも掲載される可能性があり、多くの方々の参加と活躍が期待され

ています。なお、この活動は、今後設立が予定されている市民レポーターのネットワーク組織「北条市民レポーター会議」によるボランティア活動となります。

また、市民レポーターのレポートに必要な知識や情報収集の方法を集積する場所、そしてその情報を発信・共有する物理的な場所として、「北条ネット」を活用していきます。

### 北条市民レポーター養成講座

市民レポーターになるには、養成講座への参加が必要です。養成講座は、北条地域からの情報発信や地域内の情報共有を目的に、市民レポーターの養成を目指すもので、2009年11月からスタートしています。2回参加すると北条市民レポーターとして認定され、記者証と腕章が発行されます。

養成講座は、北条コミュニティセンターで、すでに2回開催されました。第1回(11月7日)は、時事通信社防災 Web 編集長の中川和之さん、第2回(11月14日)は『上越タイムス』の月曜版を作成されている、NPO 法人くびき野 NPO サポートセンター理事長の秋山三枝子さんを講師としてお招きし、市民レポーターとして活躍するための視点、要件などをそれぞれの経験に基づいてお話いただきました。中川さんには報道のプロの立場から、市民が地域情報を発信することの重要性と発信する情報(記事)を書く際の要件を、また秋山さんからは、新聞づくりの経験がなかった NPO が、その制作過程で培ってきたノウハウについて具体的にアドバイスいただきました。

さらに、12月2日には、ビデオカメラを使った映像編集講座を行いました。映像は、的確で説得力のある情報を提供することができるため、日頃のイベントの記録や災害時の被災状況などをよりリアルに伝えることが可能になります。取材映像は、北条ネットにアップすることが可能です。

なお、この特集号では、北条で行われた市民レポーター養成講座の具体的な成果として、市民レポーターとしての要件を満たした方々にも執筆していただきました。2回の講座の内容は、4～7ページにまとめています。



市民レポーター養成講座

### 北条の魅力を発掘するための地域間交流

北条コミュニティでは、地域間交流を新潟県の防災グリーンツーリズム宣言(2008年10月)の一環としてとらえ、平時の交流が発災時の相互支援につながると考えています。現在、茨城県つくば市北条(ほうじょう)地区や神奈川県藤沢市六会(むつあい)地区などの各地域や、つくば市の市民レポーター、NPO 法人藤沢市災害救援ボランティアネットワーク(FSV net)の方々との交流を行っています。

2009年12月5～6日、北条コミュニティのメンバーがつくば市を訪れ、つくば市民レポーター、つくば市北条(ほうじょう)地区商工会の方々との交流会を実施しました。つくば市は、国の研究機関が集まる地域として、日本の他都市の街並みとは異なる様相を呈しています。つくば市民レポーターのメンバーからはこれまでの活動を、つくば市郊外の筑波山の麓に位置する北条(ほうじょう)地区では、北条商工会の方々からまちづくりの取り組みを中心に、地域課題をどのように解決しているかを伺いました。

12月12～13日には、FSV netのメンバー5名が、北条コミュニティを訪問しました。初日は被災と復興状況の報告と交流会を4時

間にわたって行い、お互いの経験やノウハウを交換しました。2日目の午前中は柏崎市内の北条由来の茶室などを、午後は古刹を巡り、北条をより理解していただくためのプログラムが用意されました。

このような交流は、改めて北条について考える良いきっかけになりました。地元の魅力とは何かを真剣に考え、それを発掘することは、今後の北条にとって大切なことです。また、これらの地域とは、北条ネットを通して日頃の取り組みなどについて情報交換するといった交流も可能ですから、今後は地域で活動するNPOなどの団体との交流も行われる予定です。さらに、北条ではすでに手作り総菜事業所「ふるさと市場・暖暖」などの活動が誕生していますから、こうした既存の取り組みにも焦点を当てて、地域間交流を契機に、さらに地域防災力を向上させたいと思います。

### これまでの活動と今後の展望

2009年の活動は上述のとおりですが、2010年1月には、藤沢市六会地区での交流が行われました。また、2月にはつくば市や藤沢市の方々が北条を訪れる計画もあります。さらには北条の子どもたちが、つくば市の先端科学について見学・体験したり、つくば市や藤沢市の子どもたちが北条でクワガタやカブトムシなどの昆虫採集を中心とした自然科学の体験をするなど、多くの方々が参加できるようなプログラムの企画も進められています。

こうした平常時のさまざまな取り組みが、地域の防災力を高め、「協働型防災社会=リスクガバナンス」の確立につながることを期待しています。(三浦伸也)

### <防災グリーンツーリズム宣言>

新潟県は、国内有数の食料生産基地となっています。加えて、美しい自然、豊かな食、伝統的に引き継がれているコミュニティでの人と人との絆などに恵まれています。日頃から都会の多くの方々と持続的にグリーンツーリズムを通じ、それぞれの地域住民が相互に様々な交流を進めるプラットフォームを築き上げ、全国の皆様に愛される「第2のふるさと」を目指してまいります。

そして、いざという時には、本県は、このプラットフォームを生かし、大災害に遭遇され困惑されておられる被災者の皆様に対して安全・安心を提供し、県内に100万人程度の入受れを目指す「防災グリーンツーリズム」を押し進めることを、ここに宣言します。

[<http://www.pref.niigata.lg.jp/seisaku/1225130471214.html> より]

## 地域防災力を高める市民活動の実践 —北条を知る、北条を伝える—

### 第1回市民レポーター養成講座 「伝えるってなんだ!？」

伊部秀男さん（北条コミュニティ推進協議会安全対策室委員）



北条コミュニティ安全対策室では、地域の情報発信および情報を共有するために北条ネットを開設し、地域の方々に北条を伝える市民レポーターとして活躍していただくため、養成講座を開催しました。第1回は、「時事通信社防災リスクマネジメントWeb」編集長の中川和之さんから、災害時の情報発信の重要性および情報の取材方法について学びました。受講者は地元の小学生7名、小学校の先生2名、地域の方々27名です。



中川さんを迎えて

中川和之さんは兵庫県芦屋市で育ち、日本大学芸術学部放送学科に入学された当時から3年半にわたり友人とバンド活動を行う傍ら、音楽事務所設立など行っておられたそうです。

同大学を卒業と同時に時事通信社に入社され、社会部に配属されたのち、警視庁、国税庁、気象庁等を担当されました。その後、気象庁を担当した翌年に地震学会会員となられ、1995年に阪神・淡路大地震が発生した際、取材応援チームとして神戸に13日間滞在され、3カ月後には編集を担当した『大地震を生き抜く』を発行されました。その後、神戸総局に転勤され、「日本災害情報学会」設立の呼び掛け人になられた後は、地震関係のさまざまな学会の委員に携わってこられました。2005年に時事通信社編集委員になられた後は、防災、減災政策のニュースや各種資料を有料で行政や企業に配信する「時事通信社防災リスクマネジメントWeb」の編集長とし

活躍されています。また、中越地震、能登半島地震、中越沖地震など、各被災地をつぶさに取材され、記事にされた実績をお持ちです。

以下に、中川さんの講座の内容をまとめました。

#### 報道とは ニュースとは

報道とは「社会の出来事などを広くつげ知らせること」（広辞苑第3版）と言われています。社会の出来事とは「新しいこと、珍しいこと、知られていないこと」であり、そのために東西南北走り回って情報を集めます。その際、新潟県内なのか、柏崎市内なのか、あるいは北条地区内なのか、町内なのかという、誰に対して伝えるのかを考える必要があります。平時の情報はニュースとは受け止められにくいきらいがあります。

では、ニュース性とは何でしょうか。それは「珍しさ」「新鮮さ」「身近さ」で決まります。「犬が人を噛んでもニュースではないが、人が犬を噛んだらニュースである」と言われるたえがありますが、珍しいことがニュースになります。また、新鮮さもニュース性を決める要素になります。どんな情報でも今日の出来事にはニュース性があるとは思われませんが、身近さもニュース性にかかわってきます。

皆さんも同じ事件や災害であっても、より自分に近いところで起こる出来事には関心があるのではないのでしょうか。例えば、外国で事故があったとしても、身近な人がかかわっていなければあまり関心を持たないのに、市内や北条地域の中で何かが起これば、よりくわしく知りたいと思うでしょう。

#### 市民レポーターとしての取材の要点

市民の力を育てるのが市民レポーターです。人間は、どんなメディアで伝えられても、伝えてもらうだけで嬉しいものです。また、社会に認められた気持ちになるも

のです。ですから身近な所から取材をすることが大切です。

#### 何でもニュースか？

記事を書く際、相手に対して何の情報を届けるのか、自分が理解して自分の言葉で、相手に分かるように書いているかを確認します。ひとりよがりの一方的な意見ではないか、またたとえ事実であっても、断片だけではなく、事実が積み重なっているかどうかということも重要です。

#### メディアを使って伝えるには、 ニュースの手法を活用

取材の際は、どこの誰かを知らせてもらうため、名刺、腕章を用意する必要があります。伝え方の上手さは関係ありません。記事の切り口、企画が勝負となります。皆で考えることで知恵が出ます。当たり前のように知られていない事柄なども、ほかの地域ではニュースにならないかもしれませんが、身近な地域であればニュースかも知れません。

#### 見出しが勝負

記事は一度に分かる分量に限界があります。新聞記事は25行、テレビニュースは50秒といわれ、短い時間で伝わるように整理しないと相手に伝わりません。読んでもらうには見出しが勝負になります。何日もの取材でできあがる特集番組、何時間の取材が数十秒の映像になるのは当たり前です。

「10を調べて1を書く」「100を調べて1を書く」。記事を膨らませる作業よりも、取材した材料を削り込む作業が大事になってきます。ただ短くても「いつ、どこで、だれが、なにを、なぜ、どのように」を押さえる必要があります。

#### ニュースのミソは誰が知っている？

資料よりも、資料を作った人がミソを知っています。資料になっていないところ、書かれていないところに発見があるかも知れませ

ん。もちろん、ポイントを聞き出すためには基礎知識も必要になります。相手の立場をよく理解して、当事者から、うまく話を聞き出す取材をしましょう。

### 協働作業で記事を仕立てる

記事はいろいろな側面から書く必要がありますから、取材についても手分けして行うこととなります。まず、アウトプットの形を考えて、そこに記事の種類、ネタの内容、担当者を割り振りながら、マンネリ、ワンパターンにならないようにするなど、さまざまな工夫が要ります。

### 文章力、表現力よりも先に身につけることがある

事前取材で何が気になったのか、何を聞いてみたいと思ったのか、実際に取材して、どこに感動したのか、どこになるほどと思ったのか、どこがめずらしいと思ったのか、そして取材結果から何を伝えたいと考えたのかを身につける必要があります。

最後に、災害時のボランティア活動は家屋の片付けだけではありません。地域への情報提供も立派なボランティア活動です。避難所や公共施設の掲示板に情報を張り紙で提供するのも市民レポーターの役割です。中越地震の際、川口町で広報誌を作成し配布したのは練馬区から来た博報堂の社員でした。このように災害時は身近な情報が不可欠です。

この市民レポーター養成講座で勉強された方々には、ぜひ地域の皆さんに身近な情報を提供していただきたいと思います。

### 参加者からの感想

中川さんは、会場の最前列に座った小学生たちにも分かるように話をされていたのが印象的でした。小学生にとっては初めてのであろう名刺を渡して、自らの自己紹介するところから取材の信頼性の話をされ、自らの話を具体的に実践するにはどうしたらよいかを分かりやすく説明される姿から、これまでの中川さんの地道な取り

組みを実感しました。

中川さんのような実践活動が、地域からの情報発信という種を蒔き、芽を育てることにつながると実感した講座でした。

市民メディア 取材シート	
取材チーム名	取材班 名前 名前
取材企画案タイトル:	
発表媒体(メディア):	
取材企画案一言メモ(何を取材してくるか、きちんと調べる)	
どこで?	
だれに話を聞く?	
何をしているところを?	
どんな話を聞くつもり?	
どこが面白そう?	
想定質問(最後3つは事前に用意する)	
1:	質問 取材メモ
インタビューしたい人の名前・立場	
2:	質問 取材メモ
インタビューしたい人の名前・立場	
3:	質問 取材メモ
インタビューしたい人の名前・立場	
4:	質問 取材メモ
インタビューしたい人の名前・立場	
取材前・デスク確認	
確認デスク名	

中川さんが提案された「市民メディア取材シート」

## 第2回市民レポーター養成講座 「市民の目からみた地域コミュニティの取材と編集」

丸山由貴さん(北条コミュニティ振興協議会副主宰)



第2回市民レポーター養成講座は、2009年11月14日(土)午後1時から行われ、小学生から70歳代の方まで総勢25名の方が参加しました。アットホームな雰囲気の中で、参加者の皆さんもとても楽しそうでした。

今回のテーマは、「市民の目からみた地域コミュニティの取材と編集」で、講師は新潟県の上越地域新聞『上越タイムス』の責任編集をされている、NPO法人くびき野NPOサポートセンター理事長の秋山三枝子さんです。同紙では、近年盛んになっているNPOの動きや地元の活動状況を分かりやすく紹介しています。

### くびき野NPOサポートセンター設立の経緯

くびき野NPOサポートセンターは、当初青年会議所が中心となって設立されました。主な活動内容としては、NPOの法人化の相談や団体の運営に関する相談などが

あります(法人化のポイント・申請手続きなど団体組織のマネジメント・PR方法など)。このようなNPOのサポートセンターは県内に無いため、県内全域からさまざまな相談が寄せられるそうです。

### 市民目線の活動で、『上越タイムス』を救う

NPOのサポートを行ってきた組織が、なぜ新聞づくりをするようになったのでしょうか。もともと『上越タイムス』は、1980年に上越地域の地元紙「上越新聞」として創刊されました。地域の行政・経済関係記事を中心に、全国紙と同じスタイルでニュースを提供し、地域新聞としての役割を果たしていましたが、1990年に経営が悪化。地元紙の灯を消すまいと経営・組織の再編成が行われ、『上越タイムス』として再出発しました。1997年からは紙面をタブロイド版に変えカラー写真を入れてスタイルを刷新、「地域に根差し

た新聞」を目指しました。しかし、外枠を変えても長年積み上げたジャーナリストの意識変革はそうスムーズに進まず、地元根差した新聞を模索しながらも業績低迷が続きました。

そんな『上越タイムス』が大きく変わったのは、2代目社長の後を引き継いだ現社長の大島誠氏が執行役員に就任した1999年から。大島氏は上越地域を中心に複数の企業経営を担う父親のもとで、経営手腕を磨いた若手企業家です。上越青年会議所のリーダーとして強い信念と先見性をもつ大島氏は、社内の意識改革に取り組むとともに、地域で暮らす人々や企業を真剣に応援する「地域の応援団」を社のモットーとし、新たな紙面づくりを遂行しました。読者が朝一番で手に取る新聞の一面トップは、爽やかな気分になれる内容の記事とカラー写真で飾る。スポーツ欄では、県代表になった地元出身選手や全国大会に選抜されたチ

ームを思い切りバックアップする。地域に役立つ、細やかで多様な情報を掲載して、全国紙や専門紙との差別化を図りました。



発行部数が飛躍的に伸びた『上越タイムス』

加えて始まった新企画が、NPO紹介のページです。世の中の新しい動きであるNPOを、地域の人々に解りやすく正しく伝えるため、新聞記者が客観的に整理した内容で紹介するのではなく、NPOに紙面を提供し、独自の視点で地域の動きや現場の活動を報告するという手法を取り入れました。掲載は毎週月曜日で、割り当てられた紙面は4ページ、そしてこの記事の制作編集をくびき野NPOサポートセンターが行っています。

ジャーナリストの目線ではなく、NPOが市民としての目線でとらえた刺激や感動・共感を伝えることで、地元住民の高い評価を得ており、現在の発行部数は低迷期の2倍の1万9600部まで増えたそうです。

### 読者をひき付ける 「取材・執筆・編集」

市民の目線で書かれた記事が、なぜそこまで読者をひき付けるのでしょうか。秋山さんは、市民が取材・執筆・編集するとき大切なこととして、①新聞業界の常識にとらわれない、②取材する側、される側双方の思いを伝える、③汗のおいや現場の様子などが目に浮かぶように伝える、の項目を挙げられました。ジャーナリストが書いたきれいな文章で淡々と綴られている紙面よりも、人の温か

さや人間臭さが伝わる紙面の方が、読者の支持を得るのでしょうか。

さらに、取材する時は時間をかける(2時間程度)、ただその場へ行って話を聞くだけでは本当にその人(取材相手)が伝えたいことを理解することはとても難しいので、あえて取材時間を長くとるのだとのこと。他にもボイスレコーダーなどでの録音はしないそうです。なぜなら、ボイスレコーダーで録音し再生した音声ではその場のリアルを書けないから、ということでした。相手の話を聞きながら、感じたことを素直に書くことが、読者のリアル感につながるのだと思います。

また、取材ではただ単に相手にインタビューをするだけでなく、相手と自分の相互の理解が必要であることもわかりました。こちらが理解したつもりでも、それが相手にとって本当に伝えたいことではなければ意味がない。相手が伝えたいことを理解した上で、自分の感じたことを書くことが大切だと話されました。秋山さん率いるくびき野NPOサポートセンターがこうした気持ちで記事を書いていることが、低迷していた『上越タイムス』の発行部数増大につながっていると感じました。

次に、記事を書く際に注意するポイントとして、①読み手に活動の背景が伝わる切り口(なぜこの人はこんなことをやっているのか)、②自分がその時感じたことに自信を持って書く、③能力以上の記事は書けない、④思い切りがポイント(推敲しすぎると焦げ付く)、⑤自画自賛・敬語は避ける、⑥読み手が読んだ時のリズム感に注意する、を挙げられました。

実際に自分で書いてみると、書き始めが一番つらく、自分の知識の無さががっかりすることがあります。そんな時には、「思い切り」が必要になります。まずは書かなければ何も始まりません。たとえ下手でも、自分がその時に感じたことを素直に書くことがとても大切だということを実感しました。

最後に、書いた記事を編集する際のポイントとして、①写真・見出し(タイトル)にこだわる、②やわらかい(楽しい)記事と堅い(大切なテーマ)記事のバランスに注意する、と述べられました。

前半が終わって、参加者は本当

に自分たちが市民レポーターになれるのか少し不安気味で、実際自分たちで話を聞き、文章を書くというのは簡単な事ではない、というのが率直な感想でした。

### 「思いを引き出す」 —インタビューゲーム

そんな不安な気持ちのまま、後半は「取材・執筆・編集」のポイントを押さえながらインタビューゲームを行いました。年齢、性別に関係なくペアをつくり、お互いにインタビューするゲームです。

3分間の自己紹介の後に、5分間で相手取材します。その内容を「この人にトキメキ!○○さん」というタイトルで記事にして、発表しました。初対面の相手ではありませんが、3分間の自己紹介でお互いに打ち解けることができ、子どもから大人まで真剣に相手取材していました。住まい、年齢、仕事や趣味などを聞く姿は、まるで本物の新聞記者のようでした。



思いを引き出す—インタビューゲーム

おもしろい記事もでき上がり、大いに盛り上がりました。気がつけば、ゲームをする前にあった不安な気持ちも無くなり、参加者は「これぐらいなら自分にもできるかも」と思えるようになっていました。まさに秋山さんの作戦勝ち、だったのではないのでしょうか。

秋山さんは講座の最後に、「文章を書く＝人を説得(納得)させる＝ラブレターです」と表現されました。記事を読む人に気持ちを伝えて説得(納得)させることはとても難しいことですが、ラブレターも同様に自分の気持を伝えて説得(納得)させるのは簡単なことではない。そんな秋山さんの言葉に参加者は全員納得!これから始動する市民レポーターから北条の皆さんへ、心温まる素敵なラブレターが届けばうれしいです。

### 「この人にトキメキ！品田さん」

(最高齢・五十嵐さんが、真珠院住職夫人の品田さんにインタビュー)  
タイトル：「若かったらこんな女(ひと)と結婚したのに…」

お歳の割に若い気分たっぷりバイク乗りがお好きで、田子倉まで走っていくとはすばらしい。息子さんはサッカーに熱を入れていて、将来はサッカー選手になるのを願っているのではないかな。

今現在、コミュニティの専門室室長として多勢の室員をまとめるのが大変、でもその役をしている時に生きがいを感じること。なんとりっぱなこと。そんな品田さんのストレス解消法は息子とのケンカ、ケンカできることは幸せなこと。はねっ返りのお母さんと自分で言っているこの人に好感、若かったらプロポーズしていたのに…。

### 「この人にトキメキ！堀田さん」

(中学生の庭山さんが、町内会長の堀田さんにインタビュー)

タイトル：「人生で大変な事、今はまっている事」

今まで一番苦労したのは、東京で就職したので、家族と別れることがとても大変だったこと。

今まで一番嬉しかったのは、自分の子どもができたこと。今はまっているのは、去年の夏の甲子園で準優勝に輝いた日本文理の試合をビデオで1日1回みること。

### <ペアを組んだ参加者の感想>

#### ●近藤彩夏さん(小学校5年生)

北条コミュニティセンターで市民レポーターの講座があり、私はお友だちと先生と一緒に参加しました。講師の秋山さんから最初になぜ『上越タイムス』を発行することになったのか、新聞を作るときにどんな工夫をしているのか説明をしてもらいました、最初は少し難しくて分からないところがありましたが、話を聞いているうちにだんだん理解することができました。

#### ●丸山智子さん(北条コミュニティ委員)

秋山さんのお話はとても親近感をもてる内容で、普段気づかないこと、気づきにくいことなど、とてもためになる話をうかがえて良かったです。インタビューゲームでは、決められた時間の中で取材し、記事を書き、編集するという作業はとても難しかったです。取材メモができてそれをうまく文章に起こすことができない、人に読んでもらえるような魅力的な文章が頭に浮かばないという事態で大変でしたが、普段話す機会の無い小学生の近藤さんといろいろな話ができてとても楽しく、久しぶりに若返った気分になりました。今後の課題は文章力の強化です。みんなに読んでもらえるような文章を書けるようになりたいですね。

## 第1回地域間交流

### つくば市民レポーター、つくば市北条地区商工会青年部との交流

三浦伸也 (NIED 研究員)

#### 地域間交流の意図(防災グリーンツーリズム宣言と地域間交流)

新潟県では、新潟豪雨災害(2004年7月)以来、中越大震災(中越地震、同年10月)、豪雪や新潟大停電、そして中越沖地震(2007年7月)など度重なる被害に見舞われました。この災害からの復旧・復興に際して、全国からの支援や協力を受けたことを感謝し、2008年10月、「第2のふるさと・新潟」として首都直下型地震等、災害時には県内に100万人程度被災者の受け入れを目指す、防災グリーンツーリズム宣言を行いました。柏崎市北条地区が取り組んでいる地域間交流は、この趣旨を踏襲して行われているものです。

一方NIEDでは、都市被災者の受け入れのみならず、柏崎市のように3年間に2度の震災に遭遇するという経験を礎に、被災時の支

援を相互に行うことを目的とした地域間交流を提唱しています。地域の特性を勘案し、NPOや地域団体といった組織も含むネットワーク型の地域間交流を推進していることが特徴です。

#### 地域間交流の概要

今回は2009年12月5日(土)～6日(日)の2日間、柏崎市北条地区コミュニティと、つくば市民レポーター、つくば市北条(ほうじょう)地区商工会の方々との交流会、視察が行われました。

北条コミュニティからは、コミュニティ振興協議会会長の江尻東磨さん、副会長の中川ナツ子さん、北条コミュニティセンター長の神林良定さん、主事の戸田洋子さん、安全対策室長の吉川公一さん、安全対策室員の品田純子さん、そして、柏崎市市民活動支援課主任の植木馨さんが参加しました。

交流をベースに、つくば市域内で北条コミュニティに共通する地域性をもつ場所をめぐり、今後の地域間交流のベースを作ることを目的としました。

#### 訪問地の紹介と訪問地での議論、収穫

##### (1) つくば市内視察

つくばに到着後、豚しゃぶ・豚料理とワインのお店で昼食。長年の研究とつくばの自然が生んだ幻の豚「味麗豚(みらいとん)」のコクのある味わいが大変好評でした。続いて、つくば土産のひとつとして挙げられるフランス菓子工房を訪問しました。

その後、古民家「さくら民家園」を見学しました。母屋(横田家住宅)は1984(昭和59)年につくば市上大角豆(かみささぎ)の横田章氏より寄贈されたもので、江戸時代後期の建築と推定されてい

ます。風水害から身を守り日照や安定した飲料水を得るため、立地選定にも工夫がみられます。かつては屋敷林が連続し、豊かな緑が集落全体を包み込んでいたそうです。集落の行事は、夏の祇園祭・盆綱・天神社祭などの祭りを中心とした伝統行事と、水田の補修や農閑期に行う「芝焼き」「堀さらい」「空き缶拾い」などの共同維持管理業務の2種類だったとのこと。民家の展示は、北条コミュニティの防災グリーンツーリズムの参考になりそうです。

「さくら民家園」から、つくば市の学園都市のある中心部を通り、筑波山麓の地域に移動しました。このあたりの集落は立派な門構えの家が多いのですが、ブロック塀が意外と多く、災害時には危険ではないかと感じました。

## (2) つくば市民レポーター 編集会議意見交換会

続いてNIEDのセミナー室において、つくば市民レポーターの方々と意見交換会を行いました。メンバーは、ホームステイの受け入れをしている方、防災士や元看護師、つくば市北条地区在住者や元在住者、FMつくば、防災ボランティアなどさまざま。



つくば市民レポーターの皆さんと

まず、北条地区コミュニティで展開している手作り総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖」について質問があり、戸田さんからの説明に続いて、中川さんから「取り組みは順調にいつているが、評判を聞いて問い合わせってくるメディアや視察への対応が大変だ」との補足がありました。

次に、防災ボランティアの方から、中越沖地震の際に茨城レスキューサポート・バイクが北条地区に支援に行ったことが語られ、既につくば市と北条地区との交流が

あったこともわかりました。

また、江尻さんは、つくば市民レポーターの具体的な活動について質問され、これに対し、日常生活における取材活動のほか、災害時に避難所としての役割が求められる市内の小学校とその校歌についてビデオ取材を行う、「つくば37スクール・コミュニティー・プロモーション～心のランドマーク」のプロジェクトと、これを地元のコミュニティFM「ラヂオつくば」で視聴できるように一体的に取り組んでいるとの回答がありました。また「ラヂオつくば」の増田和順社長から、「eコミュニティつくば」\*とコミュニティFMが連携することで、より効果的な情報発信ができるという説明がありました。

市民レポーターのテーマは、定期的に行われる編集会議で決められており、共同取材も行っているとのこと。レポートは、文字と写真による構成が中心で、特に写真の重要性が語られました。

最後に、「eコミュニティつくば」にアクセスカウンターがないことについて、アクセス数ではなく、地域にどう生かされているかで評価しているとの説明がありました。eコミ内でのやりとりがどんなに活発であっても、実際の行動に結びつかなければ、何のために作ったのか分からないということに改めて認識しました。

### \*eコミュニティつくば

地域社会を支える参加型のコミュニティWebシステムで、NIEDの災害リスクガバナンス研究プロジェクトの実証実験の場でもある。「つくば市民レポーター編集会議」でもこのシステムを活用している。

<http://reporter.e298.jp/>

## (3) 筑波山麓地区視察

2日目は筑波山を訪れ、筑波山神社でガマの油売りの口上を聞き、山頂へ。思ったよりも険しい道のりでしたが、山頂では遠くに富士山を望み、関東平野を一望する絶景が広がり、登山の苦労も吹き飛びました。また奈良時代の行政庁であった「平沢官衙」遺跡と、田井地区の再生された古民家も見学しました。

## (4) 筑波市北条地区・神郡地区 コミュニティとの意見交換会

つくば市北条地区の市民研修セ

ンターにおいて、つくば市北条商工会青年部の方々と意見交換を行いました。

つくば市北条地区は、「平沢官衙」が置かれていたことでもわかるように古くから地域の拠点であり、江戸から明治・大正期には物流の中心として大きく栄えていました。しかし、土浦や下妻市など周辺都市の吸引力の高まりもあり、商店街は衰退し交通量も激減。さらに、1985年のつくば万博の開催に伴い、筑波研究学園都市の中心部への大型店の進出などのあおりを受け、空き店舗はさらに増えシャッター通りとなってしまいました。現在は北条商工会青年部が中心となり、地域振興事業に取り組んでいます。



つくば市北条地区商工会の皆さんと

2004年には北条郷ワーキンググループが立ち上がり、市の産業戦略ワーキンググループに参加するなど活動を強化。つくばエクスプレスの開業などで筑波山への観光客も増加するなど、活性化に向けた機運が高まっています。また県の助成制度を活用した「北条ふれあい館」など新たな交流拠点も整備されています。

## 参加者の感想

今回の参加者の感想をご紹介します。

### (1) 北条コミュニティ参加者

#### ■吉川公一さん

(コミュニティ振興協議会  
安全対策室)

つくば市の景観は外国のようで、特に筑波山麓の住宅やその門構えの立派さに驚きました。古いものから新しいものまでがうまく融合した文化都市(研究所・学校・商業施設)で、文化的財産(学術・過去のデータ・最新機器)が多いと感じました。つくば市民レポ



ターとの交流では、活動状況・活動方法や取材の仕方など参考になりました。一方で、柏崎市北条地区は町内会単位、また21町内会全体としてもしっかり組織されていることを再認識しました。

#### ■神林良定さん

(コミュニティセンター長)

印象に残ったのは「雪が降らないこと」です。北条では、冬の間は積雪のため交通や農作業等が不便で、また災害、火災、事故等の場合に救急車が運行不可能となることもあります。しかしその反面、雪合戦やスキーなど雪に関する遊びがあり、優美な冬景色があります。つくば市は東京に近いこともあって大消費地へ農産物を出荷しやすく、就職率は北条に比べて高いようですが、つくば市北条地区も柏崎市北条地区も過疎集落という点では同じだと感じました。感心したのは、若い人たちがボランティアで日本全国の災害現場へ救助作業に出かけていることです。北条にも来ていただいたと聞いて、改めて感謝しています。

#### (2) つくば市サイドの参加者

##### ■増田和順さん

(ラヂオつくば社長)

今回の交流会は、日本海側に位置する柏崎市と、太平洋側の関東平野のまっただ中に位置するつくば市とでは、まったく違った自然環境を有していることを改めて認識するところから始まりました。

互いの情報をまず交換し、共通点と相違点を認識することが交流の前提として必要だと感じました。

旧来型の濃い人間関係を基盤とし信頼で活動を進める柏崎市北条地区に対し、現代型の薄い人間関係を基盤にしつつも少数だが思いの強い人々が、さまざまな情報デバイスや手法を用いて活動を広げつつあるつくば市各地区という、コミュニティにおける防災・防犯活動の手法の違いも認識しあえたと思います。

##### ■中村貴之さん

(つくば市民レポーター)

北条コミュニティの方々の説得力と行動力(エネルギー)を感じました。「暖暖」の取り組みについてはサービスの周知に苦労されている様子でしたが、地域のコミュニティFMを活用するといった意識は共通の理解だと思いました。いろいろな団体が相互に支援しあうことで、困難にも対応可能な土壌が生まれるのではないかと改めて感じました。

##### ■市川洋子さん

(つくば市民レポーター)

「人々の生きる力」「地域で、人々が、コミュニティが、生き生きすること」が、ひいては緊急時の対応にも生かされ、また平常時の防災にもつながるということがよく分かりました。柏崎とつくばの若い世代、子どもたち同士の交流もぜひ実現させたいと思います。

##### ■永倉喜代さん

(つくば市民レポーター)

常日頃からの近隣とのコミュニケーションの有無が、万が一の時の対応につながるという感じを強く持ちました。都会だけではなく、山間部においてもコミュニケーション不足が問われていたとは驚きでした。また、災害の経験を「どのように、わかりやすく」次世代につなげていくのかにも大変興味があります。

#### 今回の訪問を振り返って

今回は、町内会やコミュニティではなく、市民レポーターや商工会の方々に参加いただいたこともあり、最初から応用問題に取り組んだために交流の意図が見えにくかったという反省があります。やはり初回は、地域同士の交流のほうがわかりやすかったのではないかと印象を持ちました。

また、実際に会って話し合い、共感し、また互いの違いを認識した上で交流する。こうした人と人とのつながりから、地域と地域がつながることを実感しました。そして、こうした交流を補完する役割として、ぜひeコミュニティなどのツールを積極的に活用していただきたいと思います。

地域間交流の前提として、お互いの信頼関係の醸成は極めて重要です。この信頼関係を築き上げることで、災害時の相互援助がより実効性を持ったものになると確信した地域間交流でした。

## 第2回地域間交流

### NPO法人 藤沢災害救援ボランティアネットワーク (FSV net) との交流

吉川公一さん(北条コミュニティ振興協議会安全対策室長)



2009年12月12日(土)～13日(日)の2日間、神奈川県藤沢市のNPO法人藤沢災害救援ボランティアネットワーク(FSV net)と、北条コミュニティメンバーとの交流会が行われました。

FSV netからは事務局長の水島三千夫さん、理事の老人劇団団長の水島孝さん、藤沢市議会議員の河野顕子さん、NPO法人くらし・環境・再生ネットワーク代表の堀千鶴さん、北条サイドは、北条コミュニティ振興協議会からは会長の江尻東磨さん、副会長の中川ナ

ツ子さん、北条コミュニティセンター長の神林良定さん、主事の戸田洋子さん、副主事の丸山由貴さん、安全対策室委員の伊部秀男さん、品田純子さんが出席し、NIEDの主任研究員の長坂俊成さんと研究員の三浦伸也さんも参加されました。

初日はまず、北条コミュニティが推進している手作り総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖」で昼食をとりながら、お互いの活動について会話が弾みました。その後、北条コミュニティセンターの和室

に移動。自己紹介、プロジェクターを使用しての活動状況報告、意見交換など、夕方まで4時間近く行われました。それでも足りない分は夕食を兼ねての懇親会に引き継がれました。お互いに膝を割って本音の思いを語り合うことができ、これからの具体的な交流計画まで話題になるなど、夜が更けるまで語り合いました。

意見交換会ではまず、長坂さんから両地区の取り組みについて紹介、今後の交流に向けて期待したいとのあいさつがありました。次

に、江尻会長が北条地区のコミュニティについて説明しました。

### 北条地区コミュニティ振興協議会の活動

北条地区コミュニティ振興協議会は1976年設立し、現在の会員数は59名です。地区民および諸機関、団体、サークルで構成されており、北条公民館とともにまちづくりを進めてきました。「ふるさと愛」と「生涯学習」が原点になっています。コミュニティ、公民館、総代会の役割と連携のあり方、そして地域活性化に向けた地域課題をみんなの手で見直すために「ふるさと塾」を開設し、その結果、コミュニティ組織を改革することができました。

新しいコミュニティ委員に地域活動の基本的概念、知識、実践的手法を学び、活動してもらうために、コミュニティと公民館が共催して、「まちづくり講座」を実施。この学びを通して、コミュニティ委員の意識は「やらされている」から、「自分たちがやる」へと変化し、地域課題を見つめる目やコミュニティへの情報提供など、いろいろな面で大きく成長したと思います。例えば、地元にある八石山の荒廃を見かね、もっとふるさとの山を愛し、親んでもらおうと、登山道整備や避難小屋、トイレ設置など、住民の自主的な活動によって山が見事に復活しました。これを機に「八石の自然を守り親しむ会」（会員180人）が発足。2005年度からは同会が主体となり、八石山の整備やさまざまなイベントの企画などの運営を行っています。

2000年にはコミュニティ創立25周年を記念して、地区内の偉人と伝説を織り交ぜた音楽劇を地区民の手で創作・上演しました。キャスト、大道具、小道具、メイク、音楽、運営資金に至るまで、住民一人ひとりが自分の力で参加し、それが大きな原動力になりました。当日は1700名のお客様が来場され、皆さんに大きな感激を与えるとともに、北条の大きな誇りと財産になりました。

また、超高齢化社会に対応し地域が地域を助け合うことを目指して、2001年度に「人材バンク設立講座」を開設し、設立の可能性を探りました。翌年4月1日に人材

バンク「北条地区助け合いセンター」を発足。地域単位での民間の人材バンクは全国初で、2007年度にはNPO法人として独立しました。

北条地区は中越地震と中越沖地震を連続して被災した地域ですが、自主防災組織や要援護者台帳整備、防災訓練や携帯無線の整備など、中越地震の教訓が生かされた地域として、地域コミュニティが防災に果たす役割が高く評価されています。

### 地域課題と地域防災を結び付ける防災コミュニティ活動の実践

振興協議会では、現在、「地域の課題を解決しながら防災活動へつなげる」を念頭に、地域課題と地域防災を結び付ける防災コミュニティ活動を推進しています。

協議会、町内会（自治会）を中心に、小・中学校、PTA、老人会、交通安全協会、消防団、警察なども連携し、防災面では防災訓練、災害時要援護者対策、防災資機材の整備、主な危険箇所の洗い直し、また防犯面では、パトロール、小学校通学路の見守り活動、危険箇所の洗い直しなどを行っています。活動のステーションは北条コミュニティセンターです。

また、地域活動を担ってきた地域環境室、教育振興室、ふれあい推進室、住民起業室、人材バンク、やまなみ（広報）編集室の6専門室に加え、防災活動や地域の子どもは地域で守る推進運動（目印運動）等、防災・防犯の両面から安心・安全のまちづくりに取り組むために、新たに地区内の21町内会長等と連携した安全対策室を設置しました。

さらに、2009年9月4日には柏崎市立北条合同小学校と、初めて「学校－地域連携型防災訓練」を実施しました。平日の就学中に地震が発生したと想定し、児童の避難行動・安否確認、地域との情報連携、児童の保護者・地域への引き渡し訓練を実施。先生、児童、PTA関係者、町内会、市役所、協議会が参加しました。

### 手作り総菜事業所「北条ふるさと市場・暖暖（だんだん）」

過疎化の進行により、地区内の商店が減少する中、中越地震がさらに拍車をかけ、商店はほとんど姿を消しました。困ったお年寄り

や車の運転ができない人たちから、「食材を買える店がなく、食事に困っている」「何とかしてほしい」という声が寄せられるようになったことを受け、その要請にこたえるため、被災した建物を借り受けて改装し、2006年5月に地元の食材を生かした安価な総菜店「暖暖」を開設しました。

### 特産品「つららなす」の市場開拓を目指して

「つららなす」は、20年ほど前から西長島地内で自家用に育てられており、もともとは「万寿満茄子（ますみなす）」という名前です。アクのない淡泊な味わいで、皮の緑色の鮮やさが特徴。昨年、料理研究家の目にとまって東京の有名料理店との取引が始まり、協力農家が無農薬有機栽培に取り組んでいます。「つららなすの会」では、さらに生産を盛んにして特産化し、地域活性化につなげ、協議会内の一組織として活動したいと考えています。

### NPO法人藤沢災害救援ボランティアネットワーク（FSVnet）の取り組み

FSVnetは神奈川県藤沢市を拠点に活動しているNPO法人です。多彩な方々でネットワークを結成し、情報交換と交流で「顔の見える関係づくり」をモットーに2001年3月から準備検討委員会を設置し議論を重ね、2003年6月に設立。2006年10月にNPO法人の認可を受けました。藤沢地域だけでなく、他の地域のボランティアネットワークとも連携を図り、互いに助け合う市民社会の形成を目指し、災害時において効果的な活動ができるよう、①市民活動やボランティア活動を行う団体・個人のネットワーク化の推進、②災害時を想定したシミュレーション訓練、③災害時の活動・拠点および情報伝達手段の整備、体制づくり、④相互理解のための交流の場づくり、などの活動を行っています。

大規模な災害時は、被災者の自助・共助と防災関係機関の公助といった対応能力を上回る救援・支援が必要とされますが、これらを補い、多様なニーズに応じて行動できるボランティアが「手をつなぐこと」（ネットワーク）が重要になるとの信念に基づき、多彩な活動を展開されています。

## 意見交換会で発言されたさまざまなアイデア

それぞれの活動紹介が終わったところで意見交換が始まりました。FSV netからは、ぜひ「つららなす」を紹介したいとの要望がありました。またお互いの組織を活用できないか、まずは子どもたちの交流から地域の交流に拡大してはどうか、という意見もありました。藤沢市では、山の施設を松本市内に持っているとのこと。地区体育祭、6月に開催される「えんま市（300年の歴史を持ち、起源は馬市とされる。約600店に及ぶ露店が立ち並ぶ様子は圧巻）」も挙げられました。また、アウトドア体験は災害時に役立つことが多いので、江の島のジュニアヨットクラブとの交流も話題に上りました。さらには、地域おこしの一環として、地域の文化や歴史を題材にした市民演劇を仕掛けていくのはどうか、といったアイデアも出しました。

## 柏崎市内見学

翌日は地域の魅力を感じていただくために、柏崎市内のさまざまな施設を見学しました。

### (1) 柏崎ふるさと人物館

柏崎の文化や産業を築き上げてきた先人の足跡をたどり、この地域の歴史を理解していただけたと思います。初めて訪れたという地元のメンバーもいて、大変勉強になったと喜んでいました。FSVnetの皆さんは、藤沢市で講演をされたという比角コミュニティ松美町会長の関矢登さんと久しぶりの再会を果たし、話が尽きませんでした。

### (2) 木村茶道美術館



一服後改めて茶碗を拝見

木村茶道美術館は、1984年に柏崎市北条地区在住の寒香庵木村重義により同市内の名園・松雲山荘内に設立された、茶道専門の美術

館です。2000万円もの値が付くという重要文化財クラスの茶碗（普段は展示室のガラスケースに収められています）で、抹茶を味わいました。美術館のある庭園は、紅葉の名所として有名な松雲山荘。赤坂山公園に隣接し、1971年12月飯塚謙三氏から市へ寄贈されました。静かなたたずまいの中で、しばし美の世界に浸りました。

### (3) 番神地内の視察

FSV netの皆さんが中越沖地震の際ボランティアとして支援活動をされたという、番神地区を訪れました。復興がほぼ終わった日蓮上人ゆかりの寺院「番神堂」の境内からは、柏崎市街や柏崎港の風景を一望することができました。番神堂は、日蓮上人が1274年に佐渡から赦免されたおり、三十番神の霊を請じ迎えて祀ったものと伝えられています。



FSVnetのメンバーが支援活動を行った番神地区

さらに、一遍上人の末寺で、毛利ゆかりの北条の名刹「専称寺」を見学しました。なんと、本山は藤沢市にあるとのことで、この縁が私たちの地域交流を結びつけたのかもしれない。

昼食は、「暖暖」特製のうどんとおにぎり、漬物、デザートとフルコースでした。残ったものはお土産にお持ち帰り。初めてという食材や料理もあって、食べ物談義に花が咲きました。

### (4) 中村の大杉

白山神社の境内にあるこの大杉は、樹齢約1000年と推定されています。枝の下には乳房のような形をしたものがあり、ここから出るしずくを飲ませると乳児が丈夫になる、乳の出ない人が信心すると効果があるといわれ、乳神様として信仰を集めています。

また、長命杉ともいわれ長命に

あやかる参拝者も多く、また虫歯にも効くといわれています。



幹回り10.8mの中村の大杉

### (5) 真珠院と秀快上人

北条コミュニティ委員の品田純子さんのご主人が住職を務める真珠院には、即身仏として大変貴重な秀快上人のミイラが祀ってあります。秀快上人は真言宗豊山派の総本山長谷寺に入籍留学し、のちに大学僧に就任。1755年に帰郷して真珠院の第二十二世住職となりました。50歳にして入定を決意し、五穀を断って菜食で就業すること10年、1780年3月1日に同院裏山の石室に入り、21日に入定されたそうです。1991年には学術調査が行われ、即身仏が復元されました。学問僧の即身仏としてはわが国唯一のもので、市の文化財にも指定されています。

以上、北条での2日間の交流が無事終了し、次回は藤沢市での再会を約して解散となりました。

最後になりましたが、今回の交流についてFSV netの堀千鶴さんから感想をいただきましたので、ご紹介いたします。

「地域内にあるさまざまな課題を、地域の人々と共に積極的な解決策を探る仕組みにコミュニティの再生に向けた熱い思いを感じました。

温かな心ときめ細やかな計画、市民と接する地域リーダーの役割。継続的に行うために、NPO活動組織を設立しコミュニティビジネスを展開するなど、自治する責任、小さな政府運営を目指していることが伝わってきました。

私たちが地域での活動を始めた大きな目標と同じでした。目指したものが間違っていなかった。同じ目標を持っている人々がいるということに感動するとともに、共育の良い機会になりました。」

# プロジェクト活動報告

## 主な地域での取り組み状況

大規模な災害が起きた場合、すぐに救援がくるとは限りません。事前に地域の防災力を高め、災害への対応ができる体制を整えておくことが必要だと考えます。

私たちの研究グループでは、災害に強い地域づくりに取り組んでいます。柏崎市北条コミュニティ以外にも、茨城県つくば市、新潟県長岡市山古志地域、神奈川県藤沢市、愛知県をはじめ、全国各地で実施しております。主な地域の取り組み状況は右をご覧ください。

## 地域の防災力を向上しませんか？

地域の防災力を向上したいとお考えの町内会や自主防災組織、避難所運営組織、PTAなどのグループを募集しております。地域の防災力を高めたい気持ちをお持ちであれば、どのような団体でもご参加いただけます。お気軽にご相談ください。また、地域の取り組みのご見学も、随時、受け付けております。ご希望される方は、研究グループまでご連絡ください。(検討内容の都合などの理由で、取り組みを見学できない場合もございますので、見学希望者は事前にご一報をお願いします。)

## 各地域での取り組み状況

### 新潟県・長岡市 山古志地区

12月7日に震災対策訓練の反省会を実施し、現在の震災対策の問題点について共有しました。また、訓練計画づくりにおける段階での問題点も把握しました。

### 愛知県・春日井市 中央台

12月20日に地域の各主体の協力関係について話し合いを実施し、地域防災力のカルテを作成しました。9月にシナリオづくりの手法を取り入れた話し合いにて明らかにした課題とあわせて、各課題の解決策についての話し合いを2月28日に実施します。

### 愛知県・田原市 野田校区

11月中に野田校区13地区でまちあるきを実施し、12月4、11日に野田中学校3年生がコンピューターを使ってまちあるき結果を防災マップに入力しました。1月27日に今後の防災活動として実施する項目のリストを作成しました。



### 茨城県・つくば市 筑波小学校区

筑波山のふもとにある筑波小学校区で、震災を想定した防災シナリオづくりを11月14日に、防災マップづくりを21日に、そして、防災訓練を1月24日に実施しました。

### 茨城県・つくば市 いなほ幼稚園

私立幼稚園であるいなほ幼稚園を舞台とした防災シナリオづくりを1月28日に実施しました。

### 愛知県・吉良町 防災リーダーサポーター赤馬

吉良町の防災リーダーを中心に結成された防災リーダーサポーター赤馬では、1月17日にまちあるきを行い、30日にパソコンを用いて防災マップに入力しました。また、1月24日にシナリオづくりワークショップを行い、避難所運営におけるシナリオを作成しました。このシナリオは2月にドラマ化したします。

### 神奈川県・藤沢市 鶴沼中学校 地区防災連絡協議会

避難所運営についてシナリオづくりワークショップを行った鶴沼中学校地区防災連絡協議会では、3月28日に避難所運営訓練を実施します。また、藤沢市全域では、包括的な地域経営の一環としての防災への取り組み方や、浸水・土砂災害の観測・予測、地震リスク評価などの専門的な情報の伝達、共有、活用などの先進的な取り組みを行っています。

### 京都府・京丹後市 徳光区

12月14日に地域防災力評価を実施し、自主防や町内会がどのような主体と防災に関する協力を構築しているか把握、今後の防災活動の方針について検討しました。また、1月24日に水害経験を中心に被災経験に関する情報を収集、マップに集約しました。

### 愛知県・豊橋市 八町校区・弥生町

八町校区と弥生町では、1月までにまちあるきとパソコン入力を行いました。2月は、作成した防災マップを用いて、今後の防災活動について検討します。

## 2月以降の主な実施スケジュール

事業実施内容	開催日	実施地区
マップづくり	2月2日(火)	半田市亀崎(まちあるき結果報告会)
シナリオづくりワークショップ	2月21日(日)	鶴ヶ島市第二小学校区
防災ドラマづくり	2月6日(土)	吉良町赤馬(台本修正)
	2月13日(土)	吉良町赤馬(収録)
地域間交流	2月13日(土)	柏崎市北条
防災訓練	2月28日(日)	京丹後市徳光区
	3月28日(日)	藤沢市鶴沼中学校 地区防災連絡協議会
その他	2月28日(日)	春日井市中央台(震災対策検討会議)

## <リスク研究グループ今後の活動予定>

・「広まる絆・高まる地域防災力」地域防災シンポジウム	2010年3月7日(日) 13:00~17:00	東京国際フォーラム
・『新しい公共』を支える情報プラットフォームeコマウェアフォーラム 設立記念シンポジウム	2010年3月24日(水) 13:00~17:00	東京国際フォーラム D5ホール
・「絆」人と人をつなぐ市民レポーター つくば市民レポーター編集会議 第2回シンポジウム	2010年3月27日(土) 13:00~17:00	つくば国際会議場

## <研究グループメンバー>

長坂俊成・白田裕一郎・坪川博彰・岡田真也・田口仁  
須永洋平・李泰榮・池田三郎・佐藤隆雄・三浦伸也

発行日：2010年2月5日

編集・発行：独立行政法人防災科学技術研究所(NIED)  
防災システム研究センター  
災害リスク情報プラットフォーム研究プロジェクト  
リスク研究グループ  
〒305-0006 茨城県つくば市天王台3-1  
TEL 029-863-7553 FAX 029-863-7541  
メールアドレス：drip-office@bosai.go.jp  
URL：http://bosai-drip.jp/

編集協力：(株)地域協働推進機構

プロジェクトの最新の活動をメールニュースで毎月配信しています。詳しくは上記URLをご覧ください。